

自己評価報告書

平成 23 年 5 月 20 日現在

機関番号：34409

研究種目：基盤研究 C

研究期間：平成 20 年度～平成 23 年度

課題番号：20520365

研究課題名（和文）発話冒頭に出現する助詞に関する研究：話し言葉特有の現象の解明を目指して

研究課題名（英文）A study on utterance-initial uses of particles: to aim at investigation into the characteristic phenomena of spoken Japanese

研究代表者 中田 節子（有田 節子）

(NAKATA SETSUKO (ARITA SETSUKO))

大阪樟蔭女子大学・学芸学部・教授

研究者番号：70263994

研究分野：言語学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：発話冒頭、話し言葉、提題助詞、談話意味論、会話分析

1. 研究計画の概要

本研究は、書き言葉に対し話し言葉にはどのような特有の現象があるかを解明することを目指し、その一つの現象である助詞が発話の冒頭に現れる現象の解明を目的とする。中心的にとりあげるのは、日本語の提題助詞が、名詞句に後続するのではなく、いわば「裸の」形で発話の冒頭に現れる現象で、この現象は特定の地域、世代に限定されることなく広く分布しており、今進行しつつある言語変化の一つと捉えることができる。

本研究の計画は、大きく、基礎資料の作成と理論言語学的分析の二つに分かれる。本研究が扱うのは、話し言葉特有の現象で、しかも、これまでほとんど注目されてこなかったものなので、まず、できるだけ多くの自然会話を収集し、発話の冒頭に出現する提題助詞や取り立て助詞のデータを蓄積する必要がある。次に、これらの助詞が先行談話のどのような情報内容に照応しているのか、という観点から、集めたデータを分析する。以上が基礎資料の作成である。

つぎに、基礎資料をもとに、理論言語学的分析を行うが、統語論的側面と談話意味論的側面がある。前者については、発話冒頭に出現する提題助詞および取り立て助詞の従来の用法との関係と、発話の冒頭に残存する助詞の生成過程を明らかにすることが中心になる。後者については、動的意味理論の一つである分節談話表示理論（Segmented Discourse Representation Theory, 以降 SDRT と略す）を用いて、発話冒頭の助詞の照応関係と談話機能を明らかにすることが中心になる。以上が理論言語学的分析である。

2. 研究の進捗状況

(1) 基礎資料の作成

本研究の対象は話し言葉特有の現象ということから、自然会話を収集し、発話の冒頭に出現する提題助詞や取り立て助詞のデータを蓄積する必要がある。テレビの対談番組を録画したものを書き起こすという作業と、自然会話を収録したものを書き起こすという作業を中心におこなった。事前の調査により、比較的あらたまった場面に現れやすいことがわかっていたので、友達同士の会話に加え、インタビュー形式の会話も収集した。インタビューに関しては、インタビュアーが学生の場合と、教師の場合の両方を行い、比較できるようにした。

さらに、国立国語研究所による「日本語話し言葉コーパス」について、全発話がどのような品詞によって始められているか検索できるようにし、助詞から始まる全発話をリスト化した。

テレビのインタビュー番組の書き起こしと、自由会話、インタビュー会話の書き起こしを整理し、ホームページに公開する準備を行った。国立国語研究所による「日本語話し言葉コーパス」についても、全発話がどのような品詞によって始められているか検索できるようにし、助詞から始まる全発話をリスト化し、ホームページに公開する準備を行った。

(2) 理論言語学的分析

理論言語学的分析は、統語論的分析と談話意味論的分析に分けられる。前者については、海外研究協力者の吉田方哉氏と 2008 年度(米

国)、2009 年度 (国内)、2010 年度 (国内)で、それぞれ、打ち合わせを行い、発話冒頭に現れる「は」を含む構文がどのように派生されるかに関する統語的分析の可能性とその検証方法について議論した。

後者については、研究分担者の白井英俊氏 (中京大学) が中心に行い、発話の冒頭で助詞だけが残るという現象を、ゼロ照応の一つの用法と見なし、実際にゼロ照応ではどのようなものが先行詞となるか、また先行詞とゼロ照応との距離はどのようなものであるかを考察している。また、助詞だけが残る現象が子どもや若者の言葉に多いという仮説の元で、子どもと大人向けの談話を比較してその特徴を調べている。書き言葉資料と話し言葉資料の談話関係のタグ付けをするという作業がある程度完了している。

なお、当初の予定よりも、海外研究協力者の招聘のための旅費の支出が抑えられ、また、HP を立ち上げ、研究成果を公開する準備をしている。

3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

(理由)

自然会話データとテレビ番組データ、話し言葉コーパスデータから、該当の言語現象の抽出が終わり、最終年度の公開に向けて準備が整いつつある。

収集されたデータの分析に基づき、大学紀要、講演、学会発表を行い、一部成果を公開している。

4. 今後の研究の推進方策

本年度は、本科研最終年度でもあるので、これまでの研究成果を公開する準備を行うのが主たる活動である。まず、昨年度までに作成した基礎資料を整備し、ホームページ上に公開する準備、また、理論言語学的分析の結果を公表するための準備を行う。研究代表者は、21 年度までに作成した基礎資料 (自然会話資料、TV 対談番組資料、話しことばコーパス資料) をまとめ、今年度中に基礎資料を HP 上に公開する。次に、その資料をベースに、統語論的研究成果の公表について打ち合わせるために、海外研究協力者であるノースウェスタン大学 (米国・イリノイ州・エバンストン市) の吉田方哉氏のところに出張する。また、昨年度末に、研究成果の一部を第 7 回日本語実用言語学会で発表したが、その発表内容が Journal of Japanese Linguistics の特別号として編集されることになったので、そこに投稿する論文を作成する。研究分担者は、前年度に引き続き、談話意味論的分析を行い。本年度後半には、統語論的研究と談話意味論的分析の研究成果を公開する。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕 (計 2 件)

①有田節子「今進みつつある日本語の変化-「は」の新用法-」『大阪樟蔭女子大学日本語研究センター報告』17 号, 62-71. 2010 年 査読無

②有田節子「裸のハについての覚え書き」『大阪樟蔭女子大学日本語研究センター報告』16 号, 95-107. 2009 年 査読無

〔学会発表〕 (計 6 件)

①有田節子「省略と残存-発話冒頭に出現する提題助詞「は」の分布と機能-」Seventh International Conference on Practical Linguistics of Japanese (ICPLJ7)、サンフランシスコ州立大学 2011 年

②有田節子「今進みつつある日本語の変化-「は」の新用法」大阪樟蔭女子大学日本語研究センター公開シンポジウム「日本語のヴァリエーションをめぐる」(大阪樟蔭女子大学) 2009 年

③奥村泰章、白井英俊「談話構造コーパスの提案」認知科学会第 26 回大会 慶応義塾大学 2009 年

④白井英俊、吉岡美奈、白井純子「ゼロ照応の分析：大人向け文章と子ども向け文章の比較」言語科学会 第 11 回 年次国際大会 静岡県立大学 2008 年

⑤奥村泰章、白井英俊「小学校教科書を対象とした日本語格解析システムの作成」日本認知科学会 第 25 回大会 同志社大学 2008 年

〔図書〕 (計 2 件)

①白井英俊『数理論理学入門』中京大学情報理工学部 2010 年 136 頁

②白井英俊『計量国語学事典』朝倉書店 2009 年 423 頁

〔産業財産権〕

○出願状況 (計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

○取得状況 (計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕